
空の旅人

永音 律樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の旅人

【Nコード】

N9973R

【作者名】

永音 律樹

【あらすじ】

竜——かつては神として崇められたが、今では忌むべき存在と成り果てたもの。叶えたい『願い』のある青年が出会った旅人は、竜の幼子連れて世界を巡っていた。託された『願い』を叶える為に――……

（確認用）登場人物（前書き）

一応、見なくても話の展開には何ら支障はありません。
誰が誰だか分からなくなった時にでも見て下さい。

ネタバレはありません。多分。

（確認用）登場人物

クライン・ランバート（18歳）

都市ヴァルハーンにある人材派遣ギルド：ネオンアージユに所属している青（少）年。偶然アスールと知り合い、様々な事情から『静竜の詩』を探す旅に同行する。根に持たない性格で、かなりのお人好し。

アスール・シルバ（外見年齢15～17歳）

『静竜の詩』を探している旅人。若干人見知り気味だが、思い立つと無鉄砲な行動に出ることがある。丈の長いローブのような漆黒のコートと、少年にも少女にも見える中性的な顔立ちが特徴。

リユーイ（6歳程度？）

アスールが連れている小さな竜。周りにはドラコモドキ（ドラゴンに似た種の魔物）と称している。珍しいことに純白の体躯で、瞳は翠色。

シーナス・ヴォルワ（30代半ば位）

人材派遣ギルド：ネオンアージユの管理責任者を務める女性。もの凄いい美人だが、重度のヘビースモーカー。口調は荒く、よく不敵な笑みを浮かべている。アスールの旅に協力する。

ローゼ・グレーネマイヤー（18歳）

商業都市であるヴァルハーンの中でも、かなり有名な商家の娘。家ぐるみでネオンアージユと懇意にしており、その為もあって普通の女の子とややズレている。シーナスを尊敬している。

ジャツロ・オルランディ（23歳）

ローカ教会の司祭で、ネオンアージュに度々出入りしている青年。司祭らしくない装飾と言動から、クラインに「不良司祭」と呼ばれている。女好きでナンパが趣味とも。

ヴィオレ・トラントウル（年齢不詳）

アスールが師匠と呼び慕う人物。シーナスとは知り合い。何故か本名で呼ばれることが少ない。一部の人からは『紫眼の幻術士』と呼ばれている。

ガルセク（外見年齢20歳前後）

アスールを追う魔術師。

（確認用）登場人物（後書き）

展開次第で、随時更新予定です。

- 10 / 27 ローゼ追加、シーナスの説明にて追加事項あり
- 8 / 1 ガルセク追加
- 7 / 4 ヴィオレの説明にて追加事項あり
- 4 / 17 ジャックの説明にて「神父」↓「司祭」に変更

0 真紅の記憶（前書き）

もしかしたんですが、後の展開次第では残酷描写を入れるかもしれません。自身がそうだったものはあまり得意ではないので、恐らく無いとは思いますが、ですが、万が一という事もありますので、その点を留意してお読み下さい。

拙作ではありますが、楽しんで頂ければ幸いです。

0 真紅の記憶

憶えているのは、赤。

赤。

赤。

ただ、赤が爆ぜる景色。

鮮やかな赤ではない。

毒々しく、禍々しい赤。

そんな赤が爆ぜている景色。

そして、熱。

体が融けるような、異常な熱。

視界が歪むほどの、不常の熱。

あれは、赤と熱で埋め尽くされた世界。

赤と熱だけで構成された世界。

今でも、時々思い出す。

何故だかは分からない。

けれども、まだ、憶えている。

まだ、頭に残っている。

消えることが無い、あの日の記憶。

あの世界は、それだけのはずだった。
それだけのはずだったのに——……

0 真紅の記憶（後書き）

誤字脱字等があったらお知らせ下さい。

1 曙色の日常

ヴァルハーンとは、ツエード帝国にある海沿いの商業都市である。帝国北部の経済の中心地である為、他の都市に比べて入場の規制が緩い。故に人の出入りが多く、たくさんの人が集まりやすいので、いつも賑わっている。

だから喧噪や小競り合いは日常茶飯事で、ちょっとした悲鳴だつて珍しくはない。

眠気を誘うほど陽の光が暖かくて、春が近いのだと嫌でも感じさせられるある日のことである。

「きゃああああっ！！」

「……悲鳴か？」

「悲鳴だな」

スプリングのきいたソファーに寝転がる青年が、ふかふかの高級感だよう椅子に座る女性を横目で見やった。椅子の高級感とは裏腹に、女性はよれよれの白いシャツとしわが寄った黒いスラックスを身につけており、どことなくミスマッチな印象を受ける。だが両極の色に包まれた体躯は、椅子に座っていても分かるほどすらりとしていて手足は長く、不釣り合いなイメージをかき消していた。

女性は書類の束から金茶色の目を離さずに、形の整った唇を開いた。

「いいのか？」

「何がだ」

「助けに行かなくて」

青年は興味なさそうに目を伏せる。女性は視線が逸れたのを感じ取り、書類を処理する手を止めてニヤリと笑った。

「あの声はローゼのдарう？ お前の知り合いだと思ったが」

「ヤバい状況だったら、もっと切羽詰まった声してる。大方嬉しいことでもあったんだろ。悲鳴あげるぐらいの」

「そういうのを悲鳴とは言い難いが……流石、腐れ縁と言うべきか。何でもお見通しだな」

そう言うつと青年は渋い顔つきになった。鮮やかな紅い双眸がうつすらと苛立ちの色を帯びる。女性は先程の笑みを張り付けたまま、書類に目を戻した。

「事実を言われただけでイラつくなよ。本当のコトなんだから」

「誰のせいだよ」

「さあな」

女性はふつと息を吐くと、たちまち柳眉をひそめた。が、それも一瞬のことで、すぐに無表情になる。普通の人なら気付かないであろう小さな反応だったが、少しばかり普通じゃない青年には分かりやすい反応だった。

「どうかしたのか？」

「え？ ああ、大したコトじゃないんだがな……ちょっと、ヤなコトが起こったみたいだね。もしかしたらココにも協力要請が来るんじゃないかと……面倒だな」

「……それ、結構大がかりなことじゃないのか？」

「アタシ的には大したコトじゃない」

「うーわー……」

青年が苦々しげに毒づく。その時、見計らったようにけたたましい通信機のベルが鳴った。女性は歪んだ顔でそれを見つめる。鳴り止む気配は皆無で、女性は諦めて受話器を取った。数回言葉を交わしただけで通話が終わった。重苦しいため息を吐きながら背もたれに寄りかかる。全体重を預けたので、僅かにきしむ音がした。

「クライン」

「何だ」

「今すぐ中央広場に向かえ。仕事だ」

「自分が行かないのか」

「言っただろっ、『仕事』だと。アタシは人材を送り込むだけだ」

「……あんたが行った方が早い気がするんだけど」

青年——クライン・ランバート——は面倒くさいと言わんばかりにため息を吐きつつも、ゆっくりと腰を上げる。首や肩を軽く回して体をほぐし、仕事机の端に無造作に置かれた手袋をはめて、女性の方に向き直った。先程の雰囲気はすでに無く、目は真剣そのものである。

「んで、俺は何するんだ？ シーナス管責」

クラインの言葉を聞いて、シーナスは満足そうに笑みを浮かべた。

2 生成の組織（前書き）

作中に登場する国、組織、宗教等は全てフィクションです。
モデルにしている部分は多々ありますが、実在のものとは一切関係ありません。

2 生成の組織

人材派遣ギルド、ネオンアージュ。

ギルドとは言い難い、異色のギルドである。

本来ならばギルドとして機能出来るはずがなく（ギルドと言えば職人や商人間で結ばれる組合の為）、隅とはいえ中央広場沿いにギルドホールを持つこともかなわない。

だが、実際にはギルドだと都市に認められ、そこまで大きくないのにも関わらず、非常時には信者数世界一を誇るローカ教会の騎士団に援護要請がかかるほど、割と有力で知名度がある。

このギルドがこれまでのし上がったのは、ひとえにシーナス・ヴオルワという人物のお陰だ。

そんな風変わりなギルドで行われている仕事とは、銘打っているだけに『人材派遣』である。

「魔物が侵入した、ね……教会は何やってんだか」

シーナスに言われた通りに中央広場に行った後、仕事内容を聞いたクラインは思い付く限りの路地裏を疾走していた。

依頼はローカ教会騎士団で、仕事は都市内に侵入した魔物の捕獲ないし排除。侵入したのはたったの1匹。対象はシューラッテという小型の魔物で、噛まれた傷が少し治りにくいことしか注意することが無い、いわゆる雑魚である。

この仕事はシーナスはおろか、クラインにとってもたやすいものだった。そして、それは教会騎士団にとっても言えることである。

それなのに何故ネオンアージュに依頼が来たのか。理由は簡単だった。

（『大つぶらに動けない』って……寝ぼけてるとしか思えねー）

魔物が中に入れないよう、人の住んでいる地域には結界が張って

ある。結界は大抵ローカ教会が管理しており、都市や大きな町の教会ほどそれを誇示している。広範囲に渡る結界は、維持し続けるのに多大な労力を要するからだ。今回の事件は、結界を管理する司祭の不手際で結界が緩み、張り直す際に侵入されたことが原因である。1匹とは言え、侵入を許したのは明らかに教会のミスだ。一刻も早く手を打ちたいけれど、あんまり派手に動きすぎると表沙汰になって権威を落としかねない。

面目を保つ為の依頼。ネオンアージュが成り立っている一因である。

「……この辺にもいないとなると、どこにいるんだ？」
クラインは明るく短い茶色の髪をガシガシ掻きながら辺りを見渡した。

普通、魔物は明るい場所を嫌う。だからこそ、魔物が好む暗い場所——先程から走り回っている路地裏のような——にしていると踏んだのだが、同じような赤レンガの壁しか目に入らない。

「……場所、替えるか」
赤レンガに嫌気が差して移動しようとした時、頭の上に影が射した。

「え……」
反射的に顔を上げると、空から人が落ちて、否、降ってきた。

やや長めの前髪が風でそよぎ、バサツと衣のひらめく音だけが響き渡る。

目の前に広がったのは、闇。

形容でも何でも無い、闇そのものだった。

路地裏だけれど昼間なので結構明るいはずなのに、そこだけ切り取られたように闇が広がっていた。

降ってきた人物は何事も無かったかのように裾をはたきながらすつと立ち上がり、クラインの方を向いた。宵時の空のように蒼い瞳と、燃え盛る炎のように紅い瞳が合う。一瞬でも気を抜くと吸い込まれそうなほど瞳の蒼は深く、美しく輝いている。クラインは時が過ぎるのも忘れて、印象的な蒼を食い入るように見つめた。

「……見つけた」

瞳に何の感情も帯びないまま、蒼い瞳の持ち主が小さくつぶやく。

次の瞬間、ヒュッと鋭く風を切る音と共に、銀色にきらめくナイフがクラインの左頬をかすめた。

2 生成の組織（後書き）

？作中語録？

ローカ教 正式名称はロークアイエト教。ネグダルⅡコルタを救世主とし、唯一絶対の神として崇拜する宗教。儀式時の習慣的相違や信仰上の立場などから幾つかの教派が林立している。

ローカ教教会騎士団 ローカ教に忠誠を誓い、ローカ教の為に戦う、騎士にして信者の集団。結界を張っている教会を守護するのが主な仕事。

3 紺青の陰影

固い土塊に金属の突き刺さる音が路地裏にこだまする。すうつと肝が冷えるのが分かった。ぎこちなく頬に触れると、擦過傷はあるものの血は滲んでいない。それなのにすれすれに通って行ったナイフの痕がひどく熱かった。

「外したか」

やや高めの涼やかな声が耳に響いてくる。蒼眼の人物は新しくナイフを取り出し、勢いよく放った。今度はクラインの首のすぐ横を通り抜け、レンガの壁に突き刺さる。その弾みでレンガの欠片のこぼれ落ちる音が遠くで聞こえたように感じられた。

大きな蒼の双眸も、先程聞いたやや高い声音も、何一つ感情の機微を映し出しておらず、淡々としている。あつさりとナイフを振るう姿はコートが闇色のせいもあるが、さながら霊界から訪れた、生物に死を知らしめてそれを執行する神の遣いのようだ。心臓を射抜くように、また全てを見透かすように鋭い瞳からは殺気も感じ取れない。だが殺気すらもその無表情に溶け込んでいるみたいに見える。クラインは金縛りにあったように体が動かなかった。職務を忠実に全うするそれににらまれるのは、こういう感じなのではないかとぼんやりした頭で思う。

「……いい加減、還れ」

感情を映さない瞳を僅かに歪め、蒼眼の人物が再びナイフを投げる。クラインは思わず目を閉じた。

先程とは違う、鈍い衝突音が響いた。それと同時に断末魔の叫びが上がる。少しだけ目を開くと、視界の下端に黒い靄が映った。魔物を仕留めた時に発せられる、魔物の死の印が。

「……え？」

靄が蒸発するように消え失せる。支えを失ったナイフがぼとりと落

ち、蒼眼の人物が緩やかな動作で拾った。クラインはその様子を呆けたように眺める。

闇そのものの色のコートを着ているせいか全身真っ黒のように見えなくもないが、僅かに袖から出ている指や顔はコートの色とは対照的に白い。やや大きめの帽子——確かキャスケットとかいう種類——は黒というよりは黒を帯びた青という感じで、飾りなのかつばの両端から銀色の糸束が垂れ下がっている。腰につけたカバンは焦げ茶で、意外と全身真っ黒ではないのだが、それだけコートの黒が深いのだと思わせられた。

「……いきなり説明もせずに、怖い目に遭わせて済まなかった」

クラインがぼんやりしていると、蒼眼の人物がばつが悪そうな顔をして、勢いよく頭を下げた。クラインは急なことに頭も体もついてこられず、まともな返事すら出来ない。

「都市内に入った魔物は、今倒した奴だけだから……もう、大丈夫」
蒼眼の人物は若干苦心しながらも突き刺さったナイフを引き抜き、軽く泥や埃を振り払って腰のカバンにしまう。そしてクラインの顔をじっと見つめ、痛々しそうに瞳を揺らした。

「……本当に、ご免なさい」

一瞬頬の傷がチリ、と痛む。頬に触れられたのだと理解した時には、蒼眼の人物がいなくなっていた。

4 狸々緋の合図

「ん？」

読んでいた書類から目を上げて、シーナスは外を見た。うららかな
天気にあざわしい、雲一つない青天がめいっばい広がっている。

「……とうとう来たか」

手にしていた書類を放り投げ、煙草の火をもみ消す。そして乱暴に
仕事机の上のものを払い落とし、どこからともなく大きさのそろつ
た四角い紙の束を取り出した。手よりも少しばかり大きいそれには、
黒地に幾何学的な金の紋様が描かれている。シーナスが何やら小さ
くつぶやくと、紋様がポウと淡く光った。

「さて、こちらは準備でもしようかね」

はつきりした色のルージュが引かれた唇が、わずかに歪められた。

「あゝ、大丈夫ですか？」

声をかけられて、クラインは初めて自分が立ち尽くしていたことに
気付いた。金髪のポツチャリ系男性がオロオロしながら目の前で手
を振っている。

「あ、ああ。悪い、ボーっとしてた」

「そそそそですか、よかったです。もうすっごい焦ったですよ」

ポツチャリ系男性が心底安心したように笑顔で言うつと、垂れたお腹
が少し揺れた。それに合わせて、白を基調とした膝丈の司祭服の裾
が翻る。首元には×印に剣を突き刺したような形の金の飾り——口
力教を象徴する印、重字架クロセクス——が輝いている。

「お前、司祭か」

「そうっすよ、下っ端っすっけど。なのに、さっき魔物が侵入し
てきたとかで討伐部隊に回されちゃって、ほんと参ってるっす……」

「……それ、重要機密事項なんじゃないのか？」

「えっ、そうなんっすか!？」

ポツチャリ系男性は目を皿にし、勢いよく膝をついてうなだれた。気のせいかな、男性の周りだけ影が出来ているように見える。だがお腹がゆらゆら揺れているせいで、そこまで深刻に見えない。

「……俺は教会騎士団に魔物討伐を依頼されてるから知ってるけど」
「それを早く言ってほしいっす!！」

男性はガバツと起き上がって、目に涙をためながら叫んだ。頼りないを絵に描いた姿に、クラインは一抹の不安を覚えた。

「それにしても、魔物はどこ行ったんっすかね？ さっきから暗い場所を見て回ってるんっすけど、全然見当たらないんっすよ」

「ああ、それなら今さっき……」

「きゃああああっ!!」

クラインが言いかけたその時、表通りの方から悲鳴が聞こえた。仕事に行く前に聞いた知り合いの叫び声とは違い、恐怖や嫌悪といった、負の感情が露わになった声である。切羽詰まった声に嫌な予感がして、クラインは眉をひそめた。

「今日はやたら悲鳴が多いな……!」

男性が何か言うのを振り切って、クラインは現場に行くべく駆け出した。

クラインが来た時には、既に表通りはこみ合っていた。人ごみの中心では、誰かがかん高い声で叫んでいる。

「この人! この人が悪いのよ!!」

雑踏の中心らしき所には、3人の人が言い争っていた。正確には1人がわめき、1人がわめく人を抑え、1人が居心地悪そうに顔をしかめて辺りを見回していた。

こういう喧噪は日常茶飯事なのだが、3人の中に見覚えのある人物が混ざっているのに気付いてクラインは声を呑んだ。

（あの人、さっきの……）

「あたい見たもの！ この人がヴァルハーンに魔物を連れ込んだのを！」

「やめろ、アニー！」

赤毛の派手な服を着た女性——どうやらアニーというらしい——が、闇そのものと言えるほど真つ黒なコートを着た蒼眼の人物を指さして、キンキン声を上げていた。蒼眼の人物は一言も言わずに、真つ直ぐにアニーを見ている。が、何処か様子がおかしかった。

（動揺してる……？）

「あんたが、あんたみたいなのが、この都市に災厄を運ぶんだ！」
ひどい言いがかりに、クラインは頭に血が上るのを感じた。周りの野次馬も、理不尽極まりない発言をするアニーを非難がましい目で見つめる。アニー自身はその視線を意に介する様子もなく、連れらしき男性に抑えられながらも次々に難癖をつけていた。

ふと、蒼眼の人物がどう動くのか気になって、相変わらず無表情なのかと思いつながら横目で見やり、思わず息を呑んだ。

無感動だと思っていた大きな蒼の双眸は見開かれて更に大きくなっており、焦点が定まっていないうちにひどく揺れていた。遠目でも分かるくらい足は震え、血が通っているとは思えないほど顔が青ざめている。

ただならぬ様子にクラインは思わず

「あゝっ！ あそこに魔物が……！」

明後日の方を指さして叫んだ。大勢の人が一気に何も無い方々を向く。野次馬達の意識が喧噪から逸れた隙に、クラインは蒼眼の人物を引っ張って路地裏に駆け込んだ。

4 猩々緋の合図（後書き）

「猩々緋」の「猩々」は、想像上の動物で、オランウータンに似ているそうです。色は「緋」が付いているだけに、赤に似た感じのちよつと濃いめの赤。

5 搞色の衝動

不快さを帯びる声の不協和音から離れ去る。運が良かったのか、クライン達は雑踏に追いかけられることなく見慣れた赤レンガの住宅街の裏道にたどり着いた。よほど緊張していたのか、大した距離を走っていないのに息は切れ切れで、火照った額を撫でる風の冷たさが心地よく感じられる。

落ち着く気配のない息を整えようとして、クラインは初めて腕を掴んだままだったことに気が付いた。

「わっ、悪い！」

慌てて手を放すと、かすかに衣擦れの音を立ててだりりと力なく垂れ下がった。少しばかり息が上がっているのに、顔色は死人を思わせるほど青白い。せわしく瞳が揺れ動いていて、額にはうっすらと汗をかいている。

「お、おい、大丈夫か？」

蒼眼の人物は何も応えない。大きめの帽子が顔色を見え辛くさせているのに加え、うつむき気味だった頭が更に前へ垂れて黒を帯びた青の面積だけが増える。足が細かく震えていて、袖からのぞいて見える指先も、顔色と同じくらい白い。

ふいに蒼眼の人物の体が大きく揺らぎ、崩れ落ちそうになった。クラインはあたふたしながらも肩を支えてそれを防ぐ。捉えた肩は予想以上に小さくて、クラインよりも頭1つ分近くも背丈が違ふことに初めて気付いた。些細な知覚に呆けていると、聞き取れないほどの小さな声を耳に感じ取った。

「……がっ、……は………」

耳を澄ませてもよく聞こえないが、同じ言葉を呪文のように繰り返しつつやき続けている。2度目のただならぬ雰囲気にはクラインは妙な胸騒ぎがして、蒼眼の人物の肩を思いつ切り揺さぶった。

「おい、しっかりしろ！ どうしたんだよ！」

クラインの声に呼応するみたいに、ごそつと奇妙な衣擦れの音が耳に届いたと思ったら、突然細い肩がビクツと跳ねてクラインは手を放した。勢いよく顔も上がるが、先程の青白さは存在していない。ただ目は見開かれていて、揺れ動いていないものの緊張の色を帯びていた。

「大丈夫、大丈夫、大丈夫だから……って、あ、あれ？」

いつの間にか見知らぬ場所にいることに驚いてか、蒼眼の人物はきよきよと辺りを見回す。そしてクラインがいることに気付いて数歩後ずさった。

「君、さっきの……？ 何で……？」

「え……もしかして、何も覚えてない？」

「『何も』って……」

蒼眼の人物はいぶかしげな顔をしていたが、ふと無表情になり、それからばつが悪そうに肩を落とした。

「……済まない。初対面且つ迷惑をかけた人に、更に迷惑をかけてしまった」

そう言くと、蒼眼の人物はまた勢いよく頭を下げた。

「さっきのは、一寸嫌な記憶を思い出してしまつて……見苦しいものを見せて、本当に申し訳ない」

「え、いや、俺はただ困っているように見えたから勝手にしただけで……」

クラインの言葉に、蒼眼の人物はきよとした。

「いきなりナイフ投げつけてきて、怪我也させた人なのに……か？」

今度はクラインがきよとした顔になった。が、すぐに照れくさそうに笑った。

「いやー、気付いたら動いちゃってたんだよね。何でだかは俺にも分かんないけどさ」

頭をガシガシかいていると、蒼眼の人物は目を丸くしたまま

「……変わった人」

とつぶやいた。それはクラインの耳に届くことなく、冷たい風によ

つてかき消される。

「……あ、でも」

クラインの中で何やらひらめいた時、2人はかなり遠かったはずの不協和音が近付いてくるのを聞き取った。蒼眼の人物の顔色がさつと変わる。クラインは少しためらってから、聞きたかったことを告げた。

「なあ、さっき女の人が言っていた……魔物を連れ込んだって本当なのか？」

その言葉を全身で否定するように、蒼眼の人物は首を横に振る。それを見て、この人物は悪い人ではないと勘で悟った。

クラインは明るく笑いかけて言った。

「んじゃ、いい隠れ場所に連れてってやるよ」

6 藍鼠の対面（前書き）

前の投稿から、随分間が開いてしまいました……

6 藍鼠の対面

「ここは不審者の避難所じゃないんだがな」

毛先にややクセのある赤毛をバレッタで留めた女性が、奇妙な二人組を見て、頬杖のままニヤリと笑う。口元は歪んでいるものの、目は全然笑っていない。それでも見た人全てを釘付けにするような、至極鮮やかな笑みだった。

「その割には、管責お抱えの双子秘書があっさり部屋に通してくれたぞ」

「おや？ さてはあの2人、仕事をサボったな」

「嘘つけ。俺が誰を連れてきてるのか分かって通したんだろ」

クラインが馬鹿馬鹿しように言い放つが、シーナスは依然としてニヤニヤと嫌みたらしい笑顔を崩さない。しかし、目じりには僅かにしわが寄っている。

「おいおい、買い被りすぎだよ。アタシにはソイツが誰なのか、全然見当がつかないんでね」

クラインと蒼眼の人物は、ネオンアージユの管責室——シーナスの私室兼仕事部屋——に来ていた。野次馬と遭遇したくなさそうな蒼眼の人物に、クラインは自分のギルドに少しの間隠れるのを提案したからである。蒼眼の人物は乗り気ではなかったのだが、ギルドの特殊さを聞いて反応を示し、最終的には自ら行きたいと言い出してついて来たのだった。

シーナスの予想外の言葉に、クラインは口が開きそうになるのを抑えて瞠目する。

「それこそ嘘だろ？ 何でもお見通しの化け物美人が何言ってるんだ」

「おい、誉めるのと貶すのを同時にするな。何言いたいんだか分かるようになるだろう」

シーナスは呆れた風にこめかみに手を当て、大きくため息を吐いた。そしてクラインの陰に隠れるようにして立つ蒼眼の人物を見やる。
「で、アンタは何しにここに来たワケ？　ただ隠れに来たんじゃないんだろうし」

一瞬で笑みの消え失せた顔で尋ねられ、蒼眼の人物は伸びていた背を更に伸ばして姿勢を正す。半歩だけ横にずれてクラインの陰から出ると、緊張した面持ちで口を開いた。

「……ボクはある人を探しています。それでこの都市に来ました」
蒼眼の人物は息を吐き、険しい目つきになって言葉を紡いだ。

「1つ伺います。貴女は誰ですか？」

「人に誰だか訊く時は、まず自分から名乗るのが常識だろう」

「失礼しました。ボクは、アスール・シルバと申します」

「シルバねえ……アンタ、イスペーナの人間か？」

「そうだと思います。故郷を知らないのでも何とも言えませんが」

声だけだと穏やかに会話しているように聞こえるのに、全く友好そうに見えない雰囲気である。クラインは居心地悪そうに眉をひそめた。

「それで、貴女は誰ですか？」

「さて、誰だと思う？」

「……からかっているんですか」

「ああ、アンタからかい甲斐がありそうだし」

シーナスの言葉に、蒼眼の人物——もといアスールのまとう雰囲気 が刺々しいものになる。それを感じ取ってシーナスは宥めるみたい に手をひらひら振った。

「ま、ジョーダンはいくらににして。アタシはシーナス・ヴォルワだ。偽名だがな」

「偽名なのか！？」

「当たり前だろう、アタシは魔術師なんだ。ホントの名前——つまり真名を教えるのは、自分で自分の首絞めてるようなモンだからな」
「……やっぱり」

割と付き合いの長い人物の唐突な衝撃的発言にクラインが驚いている傍らで、アスールが納得したように小さくつぶやくと、まとっていた刺々しい雰囲気緩和された。

「ヴォルワさん、貴女に頼みたい事があります」

「悪いが人探しには付き合わんぞ。そういうのは、そのヤツに頼め」

「いえ、大丈夫です。ボクが探していたのは貴女ですから」

「……ほう？」

真剣な目つきでシーナスの方を向くアスールを見て、シーナスは面白くないと言わんばかりに目を細めた。

「アタシに頼みたいコトがあつて探していた、か……なかなか面白そうじゃないか。話によつては聞いてやらなくもないが、その前にアンタが何を必死に隠しているのか教えてくれない？」

シーナスに笑いかけられ、アスールは思いつ切り顔を強ばらせて固まった。

7 胡粉色の告白

「……教えなければ、依頼を聞く気はないという事ですか？」

「いや？ このギルドは『他所は他所、ウチはウチ』がモットーでな。依頼人クライアントの事情なんてのは正直どーでもいいんだよ」

シーナスは一端言葉を途切らせて「ただ、」と続けた。

「アンタの依頼は……正式に受理するとしたら、ちったあ理由とか報酬とかイロイロ訊いておかなきゃならねー気がするんだよ」

シーナスが懷から煙草を取り出し、口にくわえた。しばらくすると自然に火がつき、くすんだ色の煙が辺りに漂う。クラインは顔をしかめたが、アスールの方は相変わらず硬い表情のままだった。が、意を決したように顔を引き締めてシーナスを見据えた。

「……2つ聞かせて下さい」

シーナスは美味しくなさそうに吸いつつ、頭の後ろで手を組んで、ふかふかの椅子の背に思い切り寄りかかった。やや古いせいか、ギギときしむ音がする。

「何だ」

「1つ目。貴女……と、彼は敬虔なローカ教信者ですか？」

「いや、2人とも無信教者だ。だよな？」

「あ、ああ」

突然自分に話を振られ、クラインはどぎまぎしながらも答えた。アスールは2人の反応を見て一瞬瞠目するも、すぐに頭を切り替えて次の質問を告げる。

「2つ目。これからボクが何を言ったとしても、自ら第三者に洩らす事はしないと約束してくれますか？」

「いいだろう。それくらいは約束してやる」

「……有難うございます」

アスールは深々とお辞儀をすると、今度はクラインの方を向いた。
「……先程、『魔物を連れ込んでいるのか』と訊いたよな」

「ああ」

「確かに、ボクは魔物は連れ込んでいない」

小さくつぶやかれた「おいで」という声に反応して衣擦れの音がしたかと思うと、闇色のコートのフードから白い物体が飛び出てきた。それは何回かクライン達の頭の上を旋回し、アスールの右肩に静かに降りた。

「ボクが連れているのは幼竜、いや、ドラゴンの幼子だ」

「ドラゴンって、あの……!？」

アスールは真っ直ぐな瞳で静かにうなずいた。クラインは半ば信じられない気持ちで、白い物体もといドラゴンの幼子をまじまじと見つめる。ドラゴンの幼子はくあく大きな欠伸をして、「キュル」と人懐っこい鳴き声でアスールに頬ずりをした。くすぐったそうに目を細めて、アスールは優しく白く小さな頭を撫でる。その様子を度胆を抜かれたようにシーナスが眺めていた。

「ホンモノ……なのか？ 亜種のドラコモドキとかじゃなくて……」
「はい」

シーナスは驚きのあまり、吸殻が机に落ちるのも構わずにドラゴンの幼子を食い入るように見つめていた。

7 胡粉色の告白（後書き）

胡粉色は、ほぼ白と同じ色。

6 / 1 アスールのセリフの一部を変えました。

8 白藤の一服（前書き）

1ヶ月ぶりの投稿です……！

8 白藤の一服

興味津々と言わんばかりに小さなドラゴンを凝視している2人を見て、アスールは何度も目を瞬かせて尋ねた。

「……信じるんですか？」

「え、嘘なのか!？」

「いや、本当の事だが……」

何やら言いたそうに口を開くも、特に言葉を紡ぐことなく押し黙る。クラインが不思議に思っていると、シーナスが吸っていた煙草を灰皿に押し付けて言った。

「ま、『あの』ドラゴンだからな。フツは信じる以前の話だ」

「けど」とシーナスはニヤリと不敵に笑った。

「生憎、このギルドはフツじゃないんでね。見る限りウソはついていなさそうだし、とりあえずはアンタのコトを信じてもよさそうだ。そう判断するだけさ」

目をぱちくりさせてアスールは「そういうものですか」とつぶやいた。

シーナスが「『あの』ドラゴン」と言ったのには訳がある。

何故なら、ドラゴンは遥か昔に神と崇められながらも大罪を犯し、今を統べる神ネグダル「コルタ——ロー力教が信仰する神だ——」に肅清されてこの世を追放されたと伝えられる存在だからだ。

追放された存在なだけに、その姿を見たものは誰もいないと言われている。

しかし今、クラインの目の前に、伝説とも言える存在が呑気に欠伸をしている。

それなのに割とすんなり目の前の出来事を受け入れているのは、破天荒な上司によって普段から不可思議な事件に巻き込まれているせいとしか言いようがない。クラインは己の感覚の麻痺ぶりを恨め

しく思った。

「さて、アンタの隠しごとを教えてもらったことだし、依頼内容に移るとするかな」

シーナスはへらへらした空気をまといつつも、椅子にもたれるのをやめて鋭い目つきでアスールに視線を向けた。それに怯むことなく蒼の瞳の持ち主は答える。

「教えてほしい事があります」

「何だ」

「『静竜の詩』の在り処について」

シーナスの柳眉がピクツと反応する。わずかではあるが、自他共に『強者』と認めるシーナスが驚いている証拠だ。クラインはたった1日でこれほど上司を動揺させる人物に慄き、同時に彼の訊きたがつているものに興味を持った。

「……どうしてアタシなら分かると？」

「師匠が貴女ならば分かるだろうと言っていたので」

「師匠？ 誰だソイツは」

「……師匠を知る人の中に、『紫眼の幻術士』とか呼んでいる人がいました」

『紫眼の幻術士』という言葉に、シーナスが一瞬硬直した。眼鏡を一端外してよれよれの白いシャツの裾で拭き、かけ直してアスールの顔をじろじろと眺める。当の本人は居心地悪そうに少しだけ顔をしかめた。

「そうか、アンタはアイツの弟子なのか……」

ククツとひどく懐かしそうに、それでいて苦そうに小さく笑う。いつもとは違う面ばかり見せるシーナスに、クラインは背筋が凍えるのが分かった。上司を心配したからではない。大胆不敵、余裕綽々といった言葉がよく似合う人物の異変が、何か悪いことが起こる前兆の気がしてならなかったからである。

「なるほど、アイツなら……ヴィオレならそう言うだろうな」

「あの、その名前は……」

「ああ、すまない。避けるべきだったな」

シーナスがようやく普通に笑った時、クラインは得体の知れない何かが肌を撫でていくような感じがして、背筋がゾワツとした。それに続く形で、部屋中に固い殻にひびが入ったような音が鳴り響く。鋭利なそれは耳をつんざくようで、とても吉兆には思えなかった。

「今の……結界が破れた……？」

シーナスのつぶやきに反応して、アスールの顔色がさっと変わる。ドラゴンの子供にフードの中に入るよう指示すると、焦ったように口を開いた。

「すみません、知っているのなら今すぐ教えて下さい。どうやら長居出来るほどの時間がもう無いみたいなので」

「……これはアンタに関わってるのか？」

「恐らくは」

シーナスがゆるりと目を伏せる。重く深いため息を吐き、ゆっくり目蓋を持ち上げて静かに言い放った。

「悪いが、それはムリな話だ」

9 紺碧の対価

シーナスは四角い紙の束から1枚適当に取り出して、仕事机の上に放り投げた。かすかな紙の擦れる音がして、机の縁ギリギリの所で落ちることなく止まる。何がしたいのか分からず、2人でシーナスの方を見やると、目で裏返しにしろと伝えてきた。瞬時に自分ではないと察してクラインがアスールの様子を窺うと、目が合ってアスールは小さくうなづき、黒いカードに触れた。すると金の紋様が淡く光り、驚いて反射的に手を離れた。おずおずと再び触れてひっくり返すと、背中に膜の張った羽が生えている人物の絵が描いてあった。絵の下には「De ^{悪魔}Duivel」とある。

「占いですか？」

「ま、そんなモンだな」

アスールが怪訝そうな顔をしている傍らで、シーナスは仕事机にカードを広げ、両手でぐちゃぐちゃにかき混ぜている。その作業は手早いのに無駄がない。

「アタシは『静竜の詩』の在り処を知っているワケじゃない。だが、知るコトは出来る」

十分にかき混ぜた後、右手だけで3つの山に分けた。

「アイツの判断は腹立つほど正しいよ。シャクだけどな」

3つの山を1つにし、今度は左手だけでカードを並べていく。

「けど、この短時間で調べて教えるのだけはムリだ。流石に時間が無さすぎる」

不思議な形に並べられたカードの1枚をめくり、満足そうに笑った。

「西だ」

「え？」

「西に行け。恐らくそっちの方面にある。今分かるのはソレだけだ」

「……分かりました」

「ま、1週間くらいしたら多分調べ終わるだろうから、そーしたら

また来てくれ」

「いえ……それだけは出来ないの。もう十分です」

言い終わるや否や、アスールは腰のカバンに手をつ込み、何かを掴み出してシーナスの前に置いた。机に置かれたのは透明な蒼い石だった。細い鎖が付いてネックレスの形をしており、金属の銀と石の蒼が窓から零れる日の光でキラキラ輝いている。

「コレは？」

「純度の高い蒼^{ザフィリ}鉱晶です。今回の依頼の対価には十分かと……足りませんか？」

シーナスは石を手にとって、石に穴が開きそうなほど見つめて品定めをし、感嘆した風に吐息を漏らした。

「いやコレ、足りない所か過剰すぎ……」

「不十分でないのなら良いです。有難うございました」

アスールは頭が机にぶつかるとの勢いで頭を下げると、シーナスの背にある大きな窓を躊躇なく開け、枠に足をかけた。

「こんな所からで済みませんが、失礼します」

次の瞬間、バサツと衣擦れの音がして、小さな暗闇が目の前から消え失せた。

9 紺碧の対価（後書き）

？作中語録？

ザファイリ 蒼鉾晶 オリクト 蒼色で透明な貴石。純度が高いものほど蒼みが深い。

オリクト

貴石 装飾品などに用いられる天然鉾物。硬質で美しい色彩と強い光沢を有する。産出量が少ない為価値が高い。

10 鈍色の追手

目の前から完全に小さな暗闇が消えた所で、クラインは重大なことを思い出した。

「つて、ここ3階……っ！」

慌てて窓に駆け寄ると、地面を擦りそうなほど長い裾がひらひらとはためきながら舞い降りて、何事も無かったかのように翻り始めていた。1枚1枚絵を切り取ったみたいな印象的光景に、クラインは思わず息を呑む。小さな暗闇が更に小さくなって遠のいていく様子をぼーっと眺めていると、不意に何か筒状のもので頭をはたかれた振り返ってみるとシーナスが落ちていた書類を丸め、凄いい形相でたたずんでいる。

「クライン、何ボケっとしてんだ！ さっさとアイツを連れ戻してこい！」

「え、でも」

「『でも』じゃない！ この対価は過剰すぎて釣り合っていないんだ。アタシには交渉する必要がある。それにアイツにはまだ訊かなきゃならないコトもある」

激しく音を立てて書類を雑巾絞りをする風にくしゃくしゃにしながら、シーナスは管責の顔になった。

「いいか、これは上司命令だ。今すぐアスール・シルバを捕獲、この場に連行せよ！」

「……了解した」

何でわざわざ嫌な方に言い方を変えたのかとか、今手に持っているのはかなり大切な書類じゃないのかとか、色々と言いたいことはあったけれども、クラインは窓から離れてドアに向かった。常人離れているとはいえ、流石に3階の窓から飛び降りるといったことをすればケガをしかねない。

「おい、忘れモノだ」

ドアを開けた拍子に、後ろから何かが飛んできた。苦もなく捕らえると、やや危なめの任務の時に着けるシヨルダーアーマーだった。「結界を破ったヤツらと関わりがある……となれば、相手がかなり高度の術者である可能性が極めて高い。クライン、お前は一般人よりも身体能力は優れているが、所詮その程度だ。自分の力を過信して、ムチャだけはしてくれるなよ」

厳かに告げられたシーナスの声音は全く冗談味を帯びておらず、それなら自分で連れ戻しに行けよと言いたくなったものの、これが『上司命令』だったのを思い出し、ドアを開けたまま駆け出した。

「久しぶりだな、アスール」

強い『力』の気配を追って港の方に来てみて、倉庫街に足を踏み入れた時に上から声が降ってきた。声変わりがこの間終わったばかりのような低さの声に、アスールは聞き覚えがあった。

「……」

「フン、無言を貫くか。そういう所は相変わらずだな」

不快感をおおるほどに熱い風と共に、アスールの目の前に鈍色のマントをまとった人物が現れる。アスールよりは背が高いが、先程別れた青年とは同じくらいか少し低いくらいだ。乳白色のメッシュが入った鉄色の髪が、ギリギリ肩に届かない所で波を打ってなびいている。

ふと、獣の如く鋭い涅色の瞳が獰猛の色を帯びるのが目に入った。わずかに幼さの残る顔立ちをしているのだが、鋭い瞳と青年のまとう荒々しいオーラがそれを吹き飛ばして、外見年齢を引き上げている。

アスールにとって、このオーラと瞳に浮かぶ獰猛さと濁った色のマントは記憶に新しいものではない。

「……しつこいと言うべきか、足だけは速いと言うべきか、それと

も沈黙を貫くべきか、どうしようか迷ってね。言葉が出なかったんだ」

「減らず口を叩く元気はいつも通りか」

「其方も、事実を言われて虚勢を張る所はお変わりないようで」

青年の歪んだ口元が余計いびつな形になる。いつの間にかフードから出て肩に乗っていた幼竜が、牙をむいて青年を威嚇していた。本来この幼竜は温厚かつ大様なのだが、こういった連中には容赦なく敵意を露わにする。鮮やかなはずの翡翠色の瞳が興奮で赤く染まりかけているのを見て、アスールは宥めるように指先で真つ白の頭を撫でた。

「前置きはさておくとして、用件に入らせてもらおうか」

「別に言う必要もないだろう。同じ事しか言わないのだから」
そっけない答え方に、青年の眉がピクリと反応する。

「……さつさとあの人とその愛玩動物を返せ。そうすりゃ聞く必要もなくなる」

「断る。この子は愛玩動物^{ペット}なんかじゃない。あんな所で一生を費えさせるなんて、ボクが許さない」

「許す許さないの問題じゃねえんだよ……！」

青年がうなるように吼えると、それに呼応するみたいに打ち寄せる波が大きくなった。そして海から水が鞭の如く細く伸びてアスールに襲い掛かる。アスールは小さく何かを唱え、手刀で空を切った。すると水の鞭が力を失ったように地に叩きつけられ、土を湿らせていく。青年は舌打ちし、水の鞭を大量生産した。

「おい、ここは帝国屈指の経済都市だぞ。下手に事件を起こして大丈夫なのか？」

「他人の心配する前に、自分の心配をしろよ」

やや日に焼けた青年がニヤリと笑う。岩に穴をあけるほどの勢いで、水の鞭が一斉に小さな暗闇目がけて振るわれた。

11 濡羽色の規則

振るわれた鞭の先端には、知らぬ間に巨大な水球がくつついていた。細い鞭を叩きつけるよりは効果があると思っただろう、わずかな時間で鞭の先端に作り出されたその塊は、アスールを呑みこむのに十分な大きさをしている。

「Flomma！（炎よ！）」

はやる心を押さえつけ、極めて冷静にアスールは唱えた。必要最低限の言葉で構成するそれは、アスールにとって最適な呪文詠唱法ではない。それでも目の前に青色にきらめく炎の矢が具現し、水球に向かって発射された。

一拍間をおいて激しい爆発音が轟いた。

風が踊り狂い、壁が土塊に戻って建物が崩れ落ちる音が鳴り響く。靄が立ち込めて白く濁り、視界がはつきりしない。

褐色の青年は悠然とたたずみながら己の勝利を確信していた。思わず口元が緩みそうになるのを堪えつつも、無骨な手はあごを撫でている。

しかし靄が不自然に流れるのを見て、青年は撫でる手を止めた。たなびく靄は一段と不自然さを増し、ある一点を中心に渦を描き出す。そこだけ色が濃くなったかと思うと、突如として靄が吹き払われ、右袖を胸の高さまで上げた漆黒のコートが青年の視界に飛び込んだ。

「Tonzan Bresa Waegarn werband
a Faendsalegkait・（踊る風は渦巻く敵意を拒絶する）」

アスールにとって最適な呪文詠唱法——歌うように呪文を唱えること——で紡がれた言葉によって、辺りに漂っていた靄が全て消え去り、視界が明瞭になった。アスールを取り巻くように吹く風は、こめかみから流れる銀の系束や手の甲を覆う袖、くるぶしにかかる裾

とを緩やかにひらめかせている。褐色の肌と相反する白い歯が擦り合っけきりつと音を立てるが、青年の口元には満足そうな笑みが浮かんでいた。

アスールは右手と左手を組んで胸の前に持つて行き、静かに目を閉じた。そして祈るように歌い出す。

「Varfollest Elliseun, ind Raol et? t ArsChaenan. (崩壊は幻影、現実が現れる)」

静寂の中、淡い光の雨が降り注ぐ。するとたちまち土塊がレンガとなり、倉庫の形を作り出した。えぐれた地面も平らになり、飛沫の跡も消えて、何事も無かったかのような風景に立ち返った。

青年もアスールも、騒ぎを起こして目立ちたくない立場にある。

故に後で面倒なことになりそうな時は、いつの間にか敵同士であっても互いにその痕跡を隠しあうようになった。今はアスールが荒れた場を元に戻したが、アスールが行わなければ青年が行っていただろう。

そして痕跡を隠蔽する時は、お互いにお互いが不利になることをしない。辺りの修復に集中しているアスールに青年が手を出さないのもその為だ。逆に青年が修復作業をしている時は、アスールも終わるのを静かに待っている。

——全ては、目立たないようにする為。

奇妙ではあるが、これが魔術師であり、そして追う者と追われる者である2人の間に出来た、暗黙のルールだった。

アスールはゆっくり手を下ろし、ゆるゆると目蓋を持ち上げ、告げる言葉を吟味して口を開いた。

「ガルセク……いや、ガリユー。こんな事はもう止めよ……」

「その名で呼ぶなっ！」

青年——ガルセクの叫ぶ声と共に、水の鞭がいくつも伸びてきて跳

ねまわる。アスールは身動きせず、目の前まで来たそれを破裂させて無力化した。飛び散った飛沫が地面を黒く染めるが、静かにたらずむ2人は全く濡れていない。

「……その名で呼んでいいのはランセだけだ。今後その名で呼んだら、息の根を止めるから覚えておけ」

笑みは既にかき消され、眉間には苛々しくしわが刻まれている。低い声で発せられた帝国の言葉とは異なる名前を聞き、アスールの目がわずかに細くなった。だが、苦しげに歪んだ眼差しは刹那に消える。その場の雰囲気こそぐわない、ぱたぱたと軽やかな足音を聞きつけたからだ。

「どうやら、招かざる客の登場のようだな」

淫色の両眼が更に凶暴性を帯びる。幼竜が気遣わしげに小さく鳴くのを耳にしながら、アスールは不快な汗が頬を伝うのを感じた。

12 赤紅の煙霧

ヴァルハーン

都市の結界が破られてから、一刻もたないうちに魔物が都市内にどつと入り込んできていた。既に都市の出入り口である東門・西門・南門の閉鎖令は下り、教会騎士団が出勤しているものの、なかなか駆除し切れずにいる。魔物は雑魚ばかりなのだが、とにかく数が多すぎるのが原因だった。

クラインは人の波をかき分け、得物の剣で邪魔な魔物を倒しながら一目散に港を目指していた。先程港から凄まじい轟音が聞こえたからである。魔物に慣れていない為に混乱している都市の住人や、駆除に手いっぱい教会騎士団は気付いていなさそうだが、都市中を荒らし回っている魔物以上に嫌な気配があそこから感じ取れた。

貯木場を通り抜ける時、唐突に頭が割れそうなくらい鋭い痛みが走った。クラインは思わず顔をしかめて頭に手を当てる。痛みがひどくて立っていられず、右膝を立てて座り込んだ。こめかみから汗雫が吹き出て、頬を伝って落ちていくのが分かる。妙に胸が圧迫される感じがして息をするのが苦しい。目の前が蜃気楼の如く揺らぎ、視界の端に赤い靄のようなものがちらついた。

「え……？」

どこかで見たことがあるような気がして、その正体を見極めようととっさに目を見開いた。その拍子に眼界が不気味なほどはつきりし、圧迫感も消失する。目をあちこちに巡らせるが、貯木場ならではの積まれた木があるだけで、赤い靄はどこにも無い。呆然としていると、赤とは対照的な黒の靄が目に入った。

自分が今何をしていたのか思い出すのとほぼ同時に、後ろから不快なかん高い声があがった。右手に引つ掛けるように持っていた剣を構え直し、右足を軸に上半身をひねって力任せに横薙ぎにする。ほのかに赤い剣閃が弧を描き、飛びかかってきた小鬼の魔物を焼き

払った。己を鼓舞する為の叫び声は、瞬時に断末魔のそれへと変化する。黒い靄が完全に空気に呑みこまれるのを見届けて、クラインは立ち上がって一息ついた。

汗をぬぐいながら後方へ顔を向ける。かすかな喧騒が耳朵を打った。やや眉をひそめて再び走り出そうとした時、どこからともなく声が聞こえてきた。

「へえ、面白いもん持つてるんだな」

背筋を冷たいものが駆け抜けて、無意識に空を仰ぎ見ると、上から氷の槍が降ってきた。間一髪で意図的に転んで躲し、傍の積み木にぶつかる。とつさのことで上手く受け身が取れず、激しく背中を打ちつけて肺の中の空気が無理矢理吐き出された。崩れた木材が頭や肩に落ちてきて鈍痛がじわじわくるものの、何とか呻くのをこらえて立ち上がり、腰を下げて剣を構える。槍は穂が根元まで埋まるほど深く地面に突き刺さっていたが、突然ピキピキと鋭利な音を立てて砕け散った。

「なあ、それ、どこで手に入れたんだ？」

背後から聞こえた声に、クラインは反射的に剣を振りかぶる。振り下ろすと氷の槍の柄で受け止められた。鈍色のマントをまとった青年が白い歯を見せて笑い、刃を弾いて後ろに飛び退る。剣を受け止めた部分が溶けかかっているのを眺め、青年は面白いと言わんばかりに褐色の顔をほころばせた。

「それ、古代遺産クリロノミアだろ？ 一介の剣士なんかが持ち歩いてるものじゃない……お前、一体何者なんだ？」

（クリロノミア？）

さらりと言われた暴言に気を留めるのを忘れ、聞き慣れない言葉に眉根を寄せる。突然、青年が笑みを消したかと思うと、かなりのスピードで飛んできた炎の矢を手にした槍で切り払った。案外熱量があったのか、穂だけでなく柄まで溶けている。青年は舌打ちした後槍を投げ捨て、矢が飛んできた方に顔を向けた。

「おいおい、危ないだろうが。下手したら髪無くなってただろ」

「君が言えた事じゃないだろうが。不意打ちが趣味の癖に……何時から一般人に手を出すまでに落ちぶれた？」

かすかに衣擦れの音を立てながら、倉庫の陰から小さな暗闇が浮き出てきた。蒼の双眸は険悪に細められ、声は刺々しい感じがする。

「お前の魔力の残滓があつたから接触を図っただけだよ。操つてるかもしれないしな」

「嘘吐け。ボクが何の為に一般人に術を使つたのか、分かつて言つてるだろう」

「まあ……けど、こんなものを持つている奴を、お前は『一般人』
つて言うのか？」

「ボク等のようなのじゃなければ、皆『一般人』と言えんと思うが？」

刺々しい雰囲気のを和らげて、アスールは自嘲気味に小さく笑う。青年——ガルセクが一瞬顔をしかめるのをクラインは見逃さなかった。

「ところで、君は結局何をしに此処に來たんだ？」

不意にアスールは思い出したように告げた。が、その態度はどこかわざとらしい。ガルセクもそれに気付いているらしく、胡乱げながらも答えた。

「は？ こちとらお前の連れている竜を取り返しに……」

「そうか、残念だったな……リユーイ」

涼やかな呼び声に反応して、人懐こい声と共にアスールの頭上に幼竜が姿を現す。そして大きく口を広げ、もの凄い勢いで息を吐き出した。遙か昔神と崇められていた存在なだけあつて、幼くて小さいのに吐息は突風の如く強い。気を抜くとあつという間に吹き飛ばされそうに感じられた。

「Gasommalt Wend Lodandea Hemmal. (集いし風は天へと誘う)」

詠唱する傍らで、アスールはいつの間にか手にしていたナイフを地面に突き刺した。途端クラインの周りに透明の障壁が生じ、竜の吐息を遮る。すぐ傍ではガルセクを中心に風が渦を巻き、小規模の竜

巻が出来ていた。

しばらくしてアスールが指を鳴らし、幼竜が息を吐くのを止めた。たちまち竜巻が衰え、螺旋を描く微風に変わる。渦の中心にいたはずの人物は跡形も無く消え失せていた。

13 深緋の再現

「Fr a e S a t z i n g . (解除)」

一言でクラインの周りに展開されていた障壁が空気に溶け消える。先程突き刺したナイフを抜いてカバンにしまった後、アスールはクラインの方に向かって歩み出した。

クセなのか注意しているのか定かではないが、近付いてくるブーツの音は気を遣わないと聞き取れないほどに小さい。それでも一步一步近付いてくる足音は、少しずつ音量を増している。

ふいに小さな靴音が止んだ。アスールが歩みを止めたからである。正確には、アスールは次の一步を踏み出そうとして動きを停止していた。

不気味な静寂が辺りを包み込む。流石に嫌な感じがして、クラインはアスールの方に駆け出した。

途端目の奥を鋭い痛みがさし、もの凄い勢いの熱風がクラインを襲った。思わず顔の前で両腕を盾にして目をつむると、目の奥で赤い靄がちらつき、時折火の爆ぜる音が耳朵を打った。焦げ臭いにおいが鼻腔を刺激する。一瞬で人が消し炭になると思えるほどの高い気温が漂い、浮き出た汗粒が首筋を通り過ぎて背中を伝っていった。熱風が落ち着いたのを機に目を見開くと、赤い世界が広がっていた。

赤。

赤。

前を見ても、後ろを見ても、右を見ても、左を見ても、全てが赤色で埋め尽くされている。

鮮やかでない、毒々しく、禍々しい赤が爆ぜている。

そして、融けそうなくらい熱い風が体にまとわりついてくる。

あまりの熱さに視界が歪んでいる。

いきなり赤が爆ぜる音がしたかと思うと、木の軋む音が響いてき

た。音のした方を見やると、ミシミシと音を立てながらゆっくりと木の壁が迫ってきて、耳障りな音と共に木造の家が崩れ落ちた。その拍子に生じた熱風がクラインの体を貫いていった。

この奇妙な光景にクラインは見覚えがあった。それどころかよく知っていた。

何故なら、このような赤と熱が支配していた世界の中に、ただ一人いたことがあるからだ。

何とも言えない嘔吐感がこみ上げてきて、クラインは自分の胸倉を掴んだ。嫌な汗が次々と噴き出てくる。熱いせいか上手く呼吸が出来なくて息苦しく、口の中がカラカラに乾いている。

突然、爆ぜる音に混じって、パタパタとその場に似つかわしくない足音が響いてきた。胸倉を掴んだまま剣を杖代わりにして、何とか足が崩れるのを防ぐ。足音が近づくにつれ、頭を刺すような痛みがひどくなってきた。

心臓が不自然に鼓動した瞬間、目の前を小さな少年が駆けて行った。

明るく短い茶色の髪に、辺りで爆ぜている赤とは異なる紅の瞳。炎の中を走り抜けてきたせいか顔や半袖のシャツやズボンがすすで汚れて黒ずんでいる。何度か転んだらしく、両ひざ共擦りむけていて血が滲んでいるものの、他に目立った外傷は無い。必死に走っている為に息は切れ切れで、時々転びそうになりながらも、足を運ぶのは止めない。この赤い世界から抜け出すことだけを考えて、とにかく走っていることが見て取れた。

少年の後ろ姿を見て、クラインは確信した。

この少年は自分だ。

10年前、自分が体験したことが、目の前で再現されているのだと。

何故、今このようなことが起きているのか、全然分らない。
表現しがたい嘔吐感も忘れて、クラインは10年前の自分を追っ
て駆け出した。

記憶をたどって見覚えのある方に走っていくと、すぐに10年前
のクラインに追いついた。

「おとーさん、おかーさん……わっ！」

せわしなく周りを見回していた10年前のクラインが、崩れた家の
残骸に足を取られて顔から転んだ。今にも泣きそうなうめき声をあ
げながら顔を上げると、目に涙がたまっている。

「お父さん、お母さん、どこにいるの……？」

それでも泣くのをこらえて立ち上がろうとしたが、足に瓦礫が引つ
かかって立ち上がることが出来ず、また地面に顔をぶつけた。すぐ
に体を起こして引っこ抜こうと試みたが、力が足りずびくともしな
い。何度やっても結果は変わらず、とうとう10年前のクラインは
泣きじやくり出した。

一部始終を見て、思わずクラインが助けようとしやがんで瓦礫を
持ち上げようとしたら、手が瓦礫に触れられなかった。そしてこれ
は過去の再現なんだと改めて痛感し、無意識に舌打ちをした。

何も出来ない自分に歯がゆく思っている、頭の上で先程耳にし
たのと同じ木の軋む音を聞きつけた。見上げると、隣家が今にも崩
れ落ちそうなくらい傾いている。

10年前のクラインが慌てて足を引き抜こうとするが、相変わら
ず結果は変わらない。そうしている間にも、木の軋む音はだんだん
大きくなっていく。

ふと、クラインはあることに気付いた。目の前で起こっているよ
うに、足が瓦礫に引っかかって抜けなくなったのは覚えている。で

も、ここから先の記憶が無い。

今、こうしてここで過去の自分の出来事を追っているんだから無事助かったのだろうが、どうして助かったのか、どうやって助かったのか、全く覚えていない。

『……………ン』

誰かに呼ばれたような気がして空を仰ぐと、火の粉と木くずを降らせながら木の壁が迫ってきた。10年前のクラインがとっさに目をつぶり、頭を守ろうと腕で頭を抱える。しばらくしても潰される気配がないのでそっと目蓋を持ち上げると、家が傾いたままで止まっていた。

『……………イン』

「あ……………」

10年前のクラインが何かを見つけて、紅の瞳が揺らぐ。視線の先には髪を腰までのばした、10年前のクラインと背がそう変わらない子供の姿があった。

（誰だ……………？）

髪の長い子供が口を開いた時、

「クラインー!!」

聞き慣れた腐れ縁の声によって、クラインは目を覚ました。

14 薔薇色の起床（前書き）

10/16に後半部を大幅に改稿しました。お手数お掛けしますが、再読の程を宜しくお願いします。

14 薔薇色の起床

勢いよく開けた紅の目の中に、キラキラと輝く波打った金系の房が映った。糸の本を辿ると幽霊と同じくらい蒼白になった顔があった。かち合った薔薇色の瞳はひどく歪んでいて、今にも零れそうなほど溜まった涙のせいでうるうるしている。

「……ローゼ」

何だかんだで付き合いの長い少女——ローゼ・グレーネマイヤー——の名前を掠れた声で呼ぶと、ローゼは涙を溜めたままキツと目尻を吊り上げ、握った拳でクラインをポカポカ叩き出した。

「バカバカバカバカ！ 何でさっさと起きないのよ！ メチャクチャうなされてるし、呼んでも全然反応ないし、すぐくすぐごく心配したんだからあつ！！」

「ちょ、痛くないけどそんだけ叩かれると流石に痛つ……」

「いいのっ！ 人にすっごい心配かけた恨み、骨の髄まで思い知れっ！！」

そう言つて、ローゼは叩く手を止めようとしない。クラインが本気を出せば、ローゼの拳ぐらいたやすく受け止められる。しかし倦怠感かなり酷いのと、非常に心配させたらしいことの罪悪感とから、クラインは黙ってされるがままになっていた。叩かれ過ぎた分は、後できつちりやり返そうと心に決めて。

「もうその辺にしといてやれ」

流石に叩かれ過ぎだと思い始めた頃、シーナスがローゼに声をかけた。声のした方に視線を巡らせると、仕事机の上にシーナスが足を組んで腰掛けている。そこで初めてクラインは管責室にいること、自分がソファ―に横たわっていることに気付いた。

「シーナス管責……」

体を起こそうとすると、目で起きなくて良いと告げてきた。だがク

ラインはその気遣いを無視して上半身を起こし、だるそうに背もたれに体重を預ける。ローゼもクラインの隣に深く腰掛けた。シーナスは黙ってそれを見、はつきりした赤のルージユを付けた唇を開いた。

「クライン、何を見た？」

「何って……」

「ローゼに呼ばれて目を覚ますまで、アンタは何を見た？」

上司の真剣な声に、必死で記憶を手繰り寄せる。今さっきまで見ていた世界が、既におぼろげなものになりつつあった。

「……あの日の、記憶だった」

「それだけか？」

「他には……子供の時の俺自身と、あと記憶にない子供が」

「そうか。ローゼ、さっき渡したモノを返してくれ。投げていいから」

ローゼがやや躊躇いがちに握っていたものをシーナスに投げた。落とすことなく受け取り、クラインに見せつけるように鎖をつまむ。鎖の先には見覚えのある青色の貴石——アスールが対価として一方的に渡した蒼鉱晶ザファイリがぶら下がっていた。

「魔力つてのは、言うなれば術者の生命力を転換したモノだ。術者の意思とか記憶とかがわずかに籠っている。また魔力は意図すればモノに籠めるコトが可能だ。意図しなくとも、術者が肌身離さず着けているモノとかには勝手に籠っちゃうがな。ま、意図して籠めた魔力に比べれば、天と地ほどに量に差はある」

クラインは何が言いたいのかわからないという意を込めてシーナスを見つめる。その意を汲みとったのか定かではないが、シーナスは足を組み直した。相手にも分かりやすく説明する時にする癖だ。

「クライン、アンタ頬をケガしたな？ アスール・シルバをここに連れてくる前に」

「え？ ああ」

「治ってるのに気付いたか？」

慌てて頬に触れるが、先程まであつたはずの擦過傷が見つからなかった。

「アスール……あの子が治したんだろう。うつすらとだが、あの子の魔力の残滓が感じられる。さっきはアンタの傍にいたから、アンタが頬をケガしたのも、あの子が治したのも分からなかったが」
クラインはいつアスールが傷を治したのか記憶をたどる。一方、ローゼは傷が跡形もなく消えている頬をしげしげと眺め、眉根を寄せ、シーナスの方を向いた。

「あの、そのことって魔力とどう関わりがあるんですか？」

「……この蒼鉱晶ザファイリには、あの子の魔力が籠っている。んで、あの子を追いかけてもらう時に、クラインのショルダーアーマーに勝手にコレを埋め込ませてもらった。詳しい原理は定かじゃないが、キズを治す際に籠めた魔力がコレの魔力と共鳴反応を起こし、クラインに10年前の映像を見せたんだろう」

「いまいち言いたいことが分らず首を傾げる2人に、「つまり」と告げて言葉を紡いだ。

「アンタの見た映像は、あの子の魔力が見せたもの——あの子が実際に見た映像、すなわち記憶なんだよ」

シーナスの思いも寄らない発言に、クラインはおろかローゼも言葉を失った。そんな2人なんかお構いなしに、シーナスは言葉を紡ぎ続ける。

「そうそう話は変わるが、今から1・2時間前に、南門から黒いコートを着た小柄な人物の外出が確認された。『アスール・シルバを捕獲、この場に連行』という任務は失敗ってコトだな」

蒼鉱晶サファイリを弄びながら静かにクラインを見下ろす。クラインは目を閉じて俯いた。

「まあ、封鎖されてる南門を開放するように依頼して、やすやすと外出させたのはアタシだけだな」

「あんたのせいだよ！」

とんでもない上司の発言に、クラインは吠えずにいらなかった。

シーナスが宥めようと手をひらひらさせているのだが、それが余計クラインの気に障る。

「仕方ないだろ。あの子は都市中にはびこった魔物達の気を引いて、外に連れ出してくれたんだ。アタシに出来るコトと言えば、下手にローカ教会と関わり合いにならないよう、手を回すぐらいしかないじゃないか」

「けど、人にギルドに連れて来いって命令しておきながら、そんなあっさり行かせるなんて……」

「仕方ないだろ。状況が状況じゃなくなってきたんでね。先手必勝ってコトで、色々手を回す必要が出て来たんだ」

そう告げた声は、顔と共に疲弊し切っていた。

15 紺鼠の詳報（前書き）

14の後半を大幅に改稿してあります。それを踏まえた上での続きになりますので、お手数お掛けしますが、改稿後をお読みになられていない方は再読の後お読み頂けると幸いです。

15 紺鼠の詳報

「口で言うより早いだろ」と言われて渡されたのは、クラインが上司令を遂行しようとして気絶していた間の、都市内に関する口――力教会の報告書だった。

簡単にまとめるところである。

昼頃、唐突に結界が破られた。結界を張る為の神法具が破壊されたのが原因である。教会の結界維持室で不審者が目撃されたので、恐らくその人物によると教会側は判断している。

結界の破損からしばらくした後、何者かの手引きによって魔物が侵入、都市内の各所で大暴れをした。この時手引きした者は、神法具を破壊した者と同一人物だと教会側はにらんでいる。

魔物の侵入を感知してすぐ教会は騎士団を派遣し、民間人の保護を第一に魔物の駆除に当たった。しかし侵入した魔物の数があまりに多すぎた為にこずっていた。

魔物駆除を始めて十数分後、港の方面にて巨大な竜巻が発生。人為的発生だったのが幸いし、大した被害が出ることもなくあっという間に消滅した。

だがそれからあまり間もなく、都市中に奇妙な咆哮が轟いた。それに反応し、都市のあちこちで暴れまわっていた魔物達が急に鎮静化、咆哮の聞こえた方に向かって集まり出した。

咆哮の主、あるいはそれを連れていると思われる人物が、封鎖したはずの南門から魔物を引きつれて出て行った。

「んで、と――」ってもマズいコトに、教会の連中はあの子が今回の事件の首謀者だと思っている」

「本当かよ」

「こんなコトでウソ言っでどうするんだ。実際、教会じゃ内々にあ

の子を追って捕縛し、事情聴取という名の拷問にかけようとする動きがあるらしい。下手すると、こっちにまで協力要請が来るかもしれないぞ」

『拷問』と言う言葉を聞いて、ローゼが小さく悲鳴を上げた。ローゼは都市でも有名な商家の娘であり、とある事情から人材派遣ギルドなんて異端ギルドと懇意にしている間柄だ。その為にクラインやシーナスと関わり合うことが多く、普通の娘とは違って良く言えばたくましく、悪く言えば凶太くなった。それでも本職の人達とは違い、物騒すぎることに慣れていない。

「恐らく、真犯人があの子が犯人だと思わせるような細工をしてきたんだろうな。それに気付いたかどうか分からないが、あの子は奥の手を使って魔物達をここから連れ出した。あの咆哮には魔物を従わせる力があるからな」

クラインは思わず漆黒のコートのフードに隠れていた、真つ白な幼竜を思い浮かべた。ぬいぐるみほどのあの小さな体躯で、都市中にはびこっていた魔物達を従わせるだけの力があることに、今更ながら戦慄する。

「というワケでクラインにローゼ、アスールを追っていた最中に変な人物を見なかったか？」

「変な人物ねえ……」

気持ちを切り替え、今日の出来事を始めから思い返してみる。クラインが腕を組んで唸っていると、ローゼが笑顔で顔付きで拳手をした。

「思い当たるのでもいたか？」

「シーナスさん達が探している人じゃないかもしれないけど、今日すつごくカッコいい人が都市に来てたんだよ。転びそうになった所を紳士的に助けてもらったの！ クラインと違って、紳士的にだよ！！」

「悪かったな、紳士的じゃなくて」

「本当にカッコよくて、思わず悲鳴上げちゃったんだ。あ、でも力

ツコよかつたんだけど旅の人？ らしくって、やったら暗い色のマント着てたんだよね。何かそれがすつごく印象に残っちゃって」

「暗い色のマント……」

ローゼの言葉を反芻し、シーナスが思案顔になる。クラインもまたあることを思い出した。

「シーナス管責、同一人物かは分からないけど、奇妙な感じの人なら見た。濃い灰色のマントを着た男で、背は俺よりやや低め。年は同じくらいに見えたんだけど、そいつ魔術を使ってた」

「魔術を？」

「ああ。それにアスール……さんと知り合いっぽかった。仲は良くなさそうだったけど」

「濃い灰色のマントの魔術師？ んでもって、あの子の知り合い？」
シーナスの顔付きが複雑なものになった。ぶつぶつと何やらつぶやく姿は若干不気味なもの、美人は悩む姿も美しいということを証明してくれるようでもある。しかしローゼにしてみれば、普段向かう所敵なしの尊敬すべき理想の女性像が悩む姿は、ひどく落着かないものだった。隣に座る男の脇腹を肘でつつき、意味もなく声を潜めて話し掛ける。

「ちよつとクライン、何とか言ったらどうなのよ」

「何とかって、何で俺が」

「上司がすつごく悩んでるんだよ？ 何とか言って突破口見つけてあげるのが部下の役目でしょ」

「そう言われてもなあ……」

何か言わなきゃ本当に噛みついてきそうなお節焼きを横目で見つつ、クラインは考えを巡らせる。ふとすっかり忘れていた気になることを思い出し、とりあえず聞くことにした。真横から突き刺さってくる視線に耐えられなくなったからではない。

「管責、クリロノミアって何か知っているか？」

「古代遺産？ クリロノミア それがどうしたんだ？」

クラインが鈍色のマントの男に襲われた話をする、突然シーナス

が大声で笑い始めた。片方の手で机を叩き、もう片方の手でお腹を押さえ、笑い過ぎで目尻に涙が溜まっている。あまり見ない姿に、クラインとローゼは呆然とした。

「そうか！　そう見えるか！！　やっぱりな！！」

「あの、シーナスさん……？」

肩で息をしながら、シーナスは涙を白魚の指で拭った。

「いいか、古代遺産^{クリロノミア}つてのは読んで字の如く、アンティーク品のコトなんだ。けど、ただの骨董品じゃない。魔力——力が込められた物をそう呼ぶ。普通の骨董品に比べ、ちゃんとした形を保っているのは極々わずかだから、非常に価値がある」

シーナスがどこからともなくクラインの剣を取り出した。今は鞘に収まったそれを、クラインは目を見開いて凝視する。

「んで、これは古代遺産^{クリロノミア}の1つではあるが……正確に言えば、これは古代遺産^{クリロノミア}の複製品だ」

「複製品……レプリカってことですか？」

「そうだ。アタシが造ったモノなんだが、あまりにもホンモノそっくりに出来たんで捨てるに捨てきれず、クラインにあげたんだよ。

「いやー、誰だか知らんが、見事に騙されてくれたモンだな」

「ほっ」という掛け声と共に、シーナスはクラインに剣を投げ渡した。危うげにそれを捉え、2人はしげしげと観察する。

シーナスが2人を微笑ましそうに眺めていると、通信機のベルがけたたましく鳴り出した。

16 緋色の出立

「……はいはい」

渋々といった感じでシーナスが受話器をとった。相手が余程大きな声の主なのか、受話器から少し耳を遠ざけて相槌を打っている。時折「もう知ってる」だの「部下に聞いた」だの口を挟んでいるが、ほとんど聞き流しているのがクラインには分かった。

しばらく会話を交わしていると、ふいにシーナスが蒼鋺晶ザファイリを弄ぶ手を止め、真剣な顔つきになった。

「んで、ソイツをどうしようってんだ？」

わずかにクラインの眉間に皺が寄った。会話から察するに、アスールのことを話しているのだろうと推測する。クラインは何か聞き出すのか期待して上司を凝視したが、シーナスの質問から二言三言言葉を交わただけで、「分かった」の言葉を最後に通話は終了した。静かに受話器を置き、気だるそうに重く深いため息を吐く。一時管責室を沈黙が支配した。

「思った通り、厄介な展開になったぞ。しかも、アタシの望んでいない方に向かって加速してやがる」

「それって……」

「今さっき、ローカ教会騎士団の特別部隊が、教会の連中が思っている今回の事件の首謀者——黒いコートを着た小柄な人物——を追うべく、南門を通過したそうだ。どれだけ移動が速いか分からないが、遅くとも1週間で追いつけるだろうと踏んでいるらしい」

シーナスは蒼鋺晶ザファイリを真上に投げて片手でキャッチし、仕事机から降りた。

「クライン。アタシがさっき言ってたコト、覚えてるか？」

「……どれのことだ？」

「アンタがさっきまで見ていた映像。あれはアスール・シルバの記憶に因るモノって話だ」

無意識にクラインは息を呑んだ。何となくだがシーナスの言わんとしていることが分かったからだ。金茶色の瞳が剣呑に光る。

「断言は出来ないが、あの子は10年前のあの日に、何かしらの形で関わっていたハズだ」

シーナスはクラインのすぐ目の前で蒼鉱晶ザフィリの付いた鎖をぶら下げた。鼻がぶつかりそうな位置でゆらゆら揺れるそれは、催眠術を掛けるようである。

「選べ」

「何を？」

「たとえ上司の命令違反をするコトになっても、アンタの『願い』の為にあの子を追いかけて真実を得るか。それとも教会の好きにさせて、『願い』に近づく手がかりを自ら捨てるか。この2択だ」
急すぎる状況の変化に、クラインは息ではなく言葉を呑んだ。

——クラインには、どうしても叶えたい『願い』がある。

その為には、10年前のあの日の出来事を正確に知らなければならぬ。

そしてそれは、自他共に認める”最強を名乗れる”魔術師、シーナス・ヴォルワでも不可能なことである。

ならば、答えは1つしかなかった。

「……アスール、さんに追いついたとして、10年前のあの日のことがちゃんと分かるのか？」

「保証は出来ん。かなりの高確率で知っているだろうというコトしか言えんよ」

「管責が口にしてるんだ。ほぼ確信しているようなもんだろ」

クライン部下が挑発的な笑みを浮かべると、上司も同じ風に不敵に口角を上げた。そして「手え出せ」とクラインの手のひらに青色の貴石オリクトを落とす。何のつもりか問おうとクラインは見上げたが、渡した当人は

「持つとけ。出来るだけ肌身離さずな」と言つてはぐらかした。そのままふかふかの高級感ただよう椅子に座り直し、思い切り寄りかかる。頭の後ろで手を、仕事机の下で足を組み、ふんぞり返って口を開いた。

「んじゃ話が一段落ついた所で、都市を出られる時期になるまで待機つてコトでヨロシク」

「そうか、つてちよつと待てええええ！」

一端頷いてからシーナスの言ったことを理解し、クラインは声を荒らげた。一方シーナスは分かっているなとばかりに肩をすくめ、嫌味っぽく微笑む。

「仕方ないだろ。結界がまだ修復し切っていないらしくって、魔物対策に今日一杯は全門封鎖しっぱなしなんだ。流石に商人の連中が困るつーので明日1時間だけ西門を開放するらしいが、それだつて商人ギルドに属するヤツ限定。つまり、一般人はしばらく入退場を控えてくれつてコトだ」

「んな理不尽な……！」

「文句は上やら教会に言つてくれ。言い忘れたが、門番用の出入り口は使わせてもらえないぞ。有志で募った教会騎士団が、四六時中張り付いてるそうだからな」

出鼻を挫かれた気がして、クラインは唇を噛んだ。何かに八つ当たりしたい衝動を堪えて、蒼鉾晶を思い切り握りしめる。シーナスはそんなクラインを見てニヤニヤ笑った。

「おいおい、こんな程度で諦める気か？ 教会の横暴とも言える行動に、アタシが黙っているワケがないだろ」

クラインが眉根を寄せると、タイミングを見計らったかのように通信機のベルが鳴った。シーナスが喜々として取り、何度か頷いてあつという間に通話が終わる。受話器を置いたシーナスはひどく上機嫌だった。

「ローゼに感謝しろよ。荷馬車の手配が済んだそうだ。メンブールまで乗せてくれるとさ」

「ローゼが……！？」

突然出てきた名前に驚いて隣を見ると、いつの間にか腐れ縁の姿が消えていた。二重でびっくりするも、すぐに合点がいく。堂々と都市を発する為には、商人の娘という彼女の協力無しでは非常に難しい。それを見越してギルドホールに呼んでいたのかとクラインは納得した。

「けど、メンバーはここから西に位置する町だぞ？ 何で南じゃない……」

そこまで言ってシーナスがアスールに言っていた言葉を思い出した。どういふ事情があつてアスールが南門から退場したのか見当もつかないが、「西に向かえ」と教えられた以上、必ず進路を西に切り替える。つまり、西に向かつて進んでいれば、いつかは会えるということだ。どれだけ速く移動出来るか分からないから、なかなか会えないかもしれないのだが。

シーナスは組んでいた足を直して姿勢を正した。自然と2人の表情が引き締まったものになる。

「仕事だ。教会騎士団よりも先にアスール・シルバと接触し、捕縛計画を阻止、その後貴殿の願望を成就してこい」

「了解！」

クラインのはきはきした返事に、シーナスは満足そうに微笑んだ。

0 淡黄の天明

いつも目を覚ますと視界に入る色。

朝、東の空を、淡く優しい黄色の幕が覆っている。

鳥達は何かを求めて高く啼き、音を立てて黄色の中へ羽ばたいていく。

様々な色を映す空の、一日の始まりの色。

一日の中で、最も穏やかな色。

鳥になりたいと思っただことがある。

自分を取り巻くしがらみとか妨げとか、何もかもから解放されて、全てを受けて入れてくれるような、柔らかな黄色の光の中を飛んでみたい。

どんなに気持ち良いだろう。どんなに清々しく楽しいだろう。

——それは決して叶うことのない願い。

もし鳥達のように、あの色の中で自由に飛び回ることが出来たのなら。

今、こんなに苦しい思いをしなくて済んだのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9973r/>

空の旅人

2011年11月13日07時09分発行